新・奥会津だより
vol.7
2022 Late Autumn

Flow【フロウ】

福島県奥会津の暮らしに息づく伝統文化は、只見川・伊南川とその支流に集約される豊かな水の流れの中で育まれてきました。
Flowは、奥会津の宝である「豊かな自然・伝統文化・ここで生きる人」を、皆さんと見つけていく情報紙です。

奥会津をつなぐ人々 ―昭和村―

イラクサ科の多年草からむし（苧麻）を栽培し、繊維から糸をつくり、布を織る。ふるさと津軽地方の伝統的な刺し子「こぎん刺し」本来の姿を知りたくて、山内えり子さんは青森県弘前市から昭和村にやって来た。からむしでこぎん刺しの着物をつくることを目標に、17年目の"からむしを中心とした生活"を楽しんでいる。

Okuaizu news Flow

津軽伝統の「こぎん刺し」本来の姿をからむしで再現

趣味の「こぎん刺し」からからむしに興味を持ち移住

昭和村大芦地区の一軒家。レースのカーテンのように和室を彩っているのは、陰干し中のからむし（苧麻）の繊維だ。ほのかに青みがかった繊維は独特の光沢があり、キラキラと輝いて美しい。「昨日まで〝からむし引き〟（からむしの皮から繊維を取り出す作業）をやっていたんです」と、この家に住む山内えり子さんが微笑む。山内さんは青森県弘前市出身。2005年に「からむし織体験生（織姫）」として昭和村にやって来た。そのまま移住し、現在はからむしの栽培から糸づくり、機織り、小物の製作・販売までを行っている。

山内さんがつくる小物は、からむし織の布に津軽地方の伝統的な刺し子「こぎん刺し」を施しているのが特徴だ。「元々趣味でこぎん刺しをしていたんですが、昔はからむしや麻から糸をつくって布を織り、それにこぎんを刺していたと本を読んで知りました。その本で初めてからむしという言葉に出会い、いろいろ調べるうちに昭和村で今も栽培から機織りまで行われていると知って、2003年のゴールデンウィークに初めて村を訪ねました」。

『織姫交流館』で糸づくりや機織りの実演を見たが、〝草が糸になり布になる〟過程はわからず、「逆に気になってしまい（笑）織姫に応募しました」。2005年4月から一年間からむし栽培から機織りまで一通り教わり、翌年も指導補助員として後輩たちと一緒に体験。3年目から畑を借り、からむしの栽培を始めた。

（左頁へ続く）

新・奥会津だより Flow【フロウ】
こちらもチェック！
https://okuaizu.net/flowlist/

奥会津をつなぐ人々
―昭和村―

昭和村で教わったからむしで こぎんの一張羅をつくるのが夢

「まだからむしをやりたかったから」。山内さんが3年目以降も昭和村に残った理由はとてもシンプルだ。現在は野菜づくりや臨時アルバイトをしながら、“からむしを中心とした生活”を送っている。それは季節や天候に合わせ、自分の体を動かして暮らす昔ながらの営みだ。

5月21日頃の小満（しょうまん）の頃に畑の“からむし焼き”を行い、7月20日頃の土用の入りの頃から1カ月ほど刈り取りとからむし引きを行う。秋から1月まで糸づくり（苧績（おう）み）。2月・3月には機織りをして、織り上げた布にこぎん刺しを施し、小物をつくる。そしてまた、次の一年のサイクルが始まる。「季節ごとにやることがいっぱいあって忙しいんだけれど、ゆったり、一年かけてという時間の流れが好き。畑もからむし引きも糸づくりも一年に一回しかできないから、毎年反省点や気づくことが多くて（笑）今も勉強中です」。毎年試行錯誤を繰り返し、「また来年」「また来年」と続けているうちに気づいたら17年経っていたと笑う。

からむし織にこぎん刺しを施すことは、山内さんにとってごく自然なことだったという。「私にとっては“からむし織に刺す”というより、“からむしがこぎんの着物の材料だったから刺す”という自然な流れなんです」。実際、青森県の博物館にはからむし引きの道具などが展示されているが、庶民の仕事着だったため文献があまり残っておらず、学芸員に聞いても使い方がわからなかったそう。しかし昭和村ではそれらの道具が現役で使われ、村の人たちが当たり前のようにからむしから糸をつくり、布を織る営みを続けている。それは、今は失われてしまったこぎん刺し本来の姿でもある。

「健康に気をつけながら昭和村にいて、毎年少しずつでも成長しながらからむしを続けたい」と話す山内さんの目標は、こぎん刺しの着物を一着つくること。「まだ小物しかつくっていませんが、昭和村で教わったからむしで、今でもこぎん刺しの着物を人の手でつくれるんだよと青森県の人たちにも伝えたい。弘前で作品展を開いて見てもらえたらいいですね」。山内さんの屋号は「monderico（もんどりこ）」。ふるさと弘前のねぷた囃子（ばやし）の掛け声が由来だ。自身のアイデンティティを込めた名前と共に、山内さんはこれからも昭和村でからむしを中心とした生活を続けていく。

様々な幾何学模様の組み合わせが美しいこぎん刺し。からむしや麻の布に刺し子をすることで丈夫になり、肌触りがよくなる効果があったという

からむしの繊維を指で細く裂き、1本1本つないで糸にしていく。根気のいる作業だが、山内さんはこの“糸づくりの時間”が大好きだそう

バッグ、ポーチ、ふくさ、名刺入れなど、からむし織にこぎん刺しを施した山内さんならではの作品。不定期でクラフトイベントなどに出店している

山内えり子さん

青森県弘前市出身。実家は果樹農家を営んでおり、子どもの頃から冬の手仕事が身近な環境で育つ。地元の大学を卒業後、学習塾に勤務。2005年「からむし織体験生事業」に参加し、昭和村に移住。現在はからむしの栽培を行いながら、「monderico（もんどりこ）」の屋号でからむし織の布に津軽のこぎん刺しを施した小物の製作・販売をしている

monderico（もんどりこ）

TEL：090-2369-9465

ただでん掲示板 vol.7

只見川電源流域振興協議会からのお知らせ

奥会津クラフトマルシェ 開催のお知らせ

奥会津7町村から異なる特色を持ったクラフターが大集合！これまで本紙の表紙を飾った方々も出店します。一つひとつ丁寧に、想いを込めて仕上げた作品を販売するマルシェを下記により開催しますので、ぜひお越しください。

奥会津クラフトマルシェ in あゆむCafé

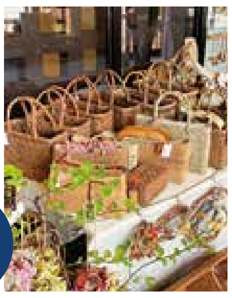
場所 スマートシティAiCT　交流棟（会津若松市）
福島県会津若松市東栄町1-77

日時 10月29日（土）　10:00～16:00
10月30日（日）　10:00～16:00

奥会津クラフトマルシェ in きとね

場所 みなみあいづ森と木の情報・活動ステーション「きとね」（南会津町）
福島県南会津郡南会津町田島字宮本東33番地1

日時 11月26日（土）　10:00～15:00



【出店者情報】

確定次第、只見川電源流域振興協議会HP（https://okuaizu.net/）にて公開します。

くわしくはこちら

※参考：前回出店者情報

木工房MEGURO（柳津町）会津桐の木育製品
工房あかるむ（三島町）会津木材のアクセサリー
編み組細工そうら（三島町）編み組細工の鞄、財布
尾瀬檜枝岐浪漫紀行（檜枝岐村）曲げわっぱ
畑からそだてた布（昭和村）からむし織製品
おぜしかプロジェクト（南会津町）鹿革製品

【お問い合わせ】

只見川電源流域振興協議会
担当　木村、鈴木
TEL：0241-42-7125
FAX：0241-42-7127
MAIL：tdrsk@okuaizu.net

読者の声

●只見川と言えば、昔、父が勤務していた発電用のダムを思い出します。2022年7月22日にラジオで只見川鉄道に歌があることを知りました。機会があれば、Flowで紹介してくださればありがたいです。（東京都板橋区・TMさん）

●30年以上も前に檜枝岐村に住み、毎月尾瀬に行っておりました。たまたまアーネスト・サトウの伝記を読んでいました時にFlow vol.5が届きました。尾瀬保全に努めた武田久吉が、サトウの次男と知り、感動いたしました。いつかメモリアルホールに行きたいと思いました。また、木工の目黒さんの考え方、生き方もすばらしいと思いました。工房にも行ってみたいです。（福島県会津坂下町・KKさん）

●会津の旅と登山は私の人生の楽しみです。残る人生も、会津に行って楽しみたいです。（福島県郡山市・FTさん、FKさん）

編集・問合せ先
新・奥会津だより「Flow」編集部（株式会社日進堂印刷所内）
〒960-2194　福島市庄野字柿場1-1
TEL:090-6852-0953（専用電話）　FAX：024-594-2041
Eメール：flow@nisshindo.co.jp

ご意見・ご感想をお寄せください。
奥会津だよりの定期購読を希望される方は、編集部まで、発送先（ご住所・お名前）をお知らせください。
個人情報の取扱いにつきましては適切に管理を行っています。詳しくは、日進堂印刷所のホームページをご覧ください。

奥会津（おくあいづ）歳時記の郷

自然の中に
暮らすいとなみ、
100年先のみらいへ。

最新情報はホームページでご確認ください。

只見川電源流域振興協議会
〒968-0006　福島県大沼郡金山町大字中川字上居平933番地
奥会津振興センター内
TEL:0241-42-7125　FAX：0241-42-7127
Eメール：tdrsk@okuaizu.net

只見川電源流域振興協議会の主催・共催事業については、最新情報をホームページで随時公開しています。
本紙は電源立地地域対策交付金の事業より作成されています。

掲示板や壁新聞などにご活用ください。

okuaizu museum
奥会津
ミュージアム

奥会津ミュージアム、始まる。

９月２日、三島町交流センター山びこにおいて、只見川電源流域振興協議会主催による「奥会津ミュージアム館長委嘱状交付式」を行い、「奥会津ミュージアム」を報道関係者などにお披露目しました。

只見、檜枝岐、南会津、柳津、三島、金山、昭和の構成７町村の町村長、来賓の会津、南会津の両地方振興局長らが出席し、会長の舟木幸一昭和村長より学習院大学教授の赤坂憲雄氏（元福島県立博物館館長）に委嘱状を交付しました。

委嘱状の交付を終えた舟木会長は「地域の伝統を１００年先までつなぐきっかけにしたい」とあいさつしました。また、委嘱状の交付を受けた奥会津ミュージアム館長（以下、館長）の赤坂憲雄氏は、「奥会津らしさを地域の人々と一緒に次世代につないでいく」と語りました。

第２部では、奥会津ミュージアムＷｅｂ版に関するディスカッションが行われ、奥会津にゆかりのある奥会津地域内外のライターたちがそれぞれの取材や執筆への想いを語りました。

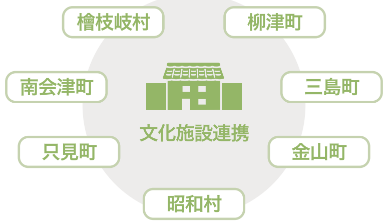
「奥会津ミュージアム」は奥会津７町村全体を舞台に、施設を持たないエコミュージアムとして捉え、地域の生活文化や自然、人々の生き様など、古の時代より継承されてきた地域の宝や新たな文化価値のあるものをこれから100年先の未来へと伝え、新しい奥会津の風景を作ろうとする活動です。今後は、奥会津7町村文化施設間連携事業、奥会津ミュージアムWeb版の運用、奥会津デジタルアーカイブの運営を事業の柱とし、赤坂館長より事業の取り組みに対する指導・助言をいただくこととしています。

奥会津ミュージアムとは

第４期只見川電源流域振興計画に掲げた基本施策「奥会津らしさの整理・継承」に基づく地域づくりを推進するため、只見、檜枝岐、南会津、柳津、三島、金山、昭和の構成７町村を舞台に、施設を持たないエコミュージアムとして位置づけ、地域一帯が幕府の直轄地であった「南山御蔵入領」の時代、さらにはそれ以前の古から継承してきた独特の生活文化などを継承・発展させ、地域のプライドとして育てていくことにより、その特徴や価値を奥会津の「らしさ」として創造していくものです。主に3事業を柱としています。

okuaizu museum 01

奥会津7町村文化施設間連携事業



７町村の文化施設等や学芸員などの文化担当者が連携して、毎年共通のテーマで企画展を開催することによって、奥会津のありのままの地域性や文化に触れられるようにします。各町村にある既存のミュージアム（博物館、美術館、資料館等）を周遊することにより、地域の文化的な価値の理解と文化を通じた交流人口の拡大を目指します。

okuaizu museum 02

奥会津ミュージアムWeb版の運用

７町村在住や奥会津にゆかりのあるライターたちが、地域の生活文化や人へ取材したコラムを掲載します。ライターによって様々な切り口から紡がれた、「奥会津で暮らす人々の息遣いが聞こえるような文章」をとりまとめたバーチャル体験を通じて、地域内外の人々が、生きた奥会津に触れることを可能とするものです。

okuaizu museum 03

奥会津デジタルアーカイブの運営

７町村が保存する文化財や歴史的資料、檜枝岐歌舞伎に代表される伝統芸能などをアーカイブとして公開します。いつ、どこからでもWebを通じて奥会津の魅力へアクセスできる仕組みを作り、地域内外の人々がよりリアルに奥会津文化に触れるきっかけとなる情報発信を行います。

奥会津ミュージアム構想

奥会津ミュージアム館長　赤坂　憲雄

奥会津ミュージアムとは、なにか。

それは、奥会津という豊饒なる物語を抱いて生きるために、

文化／産業／観光をやわらかく、有機的に、あらゆる境界を越えて繋ぎながら、どこまでも増殖してゆく知と技と情報のネットワークの結接点として創造される、いま・ここに初めて姿を現わす、未来志向型のミュージアムである。

いわゆる博物館や美術館のような施設は、どこにも持たない。

人が集まる、ささやかな広場だけは、確保するだろう。

奥会津ミュージアムWebは、

奥会津に生きる人々の声に、大地のささやきに耳を澄ましながら、

その暮らしと生業の場を、あるがままに生きられた博物館に見立てるエコ・ミュージアムをやわらかく包摂して、Web空間に立ち上がるデジタル・ミュージアムである。

だれも見たことがないやり方で、〈歩く・見る・聞く〉を丁寧に重ねながら、いまを生きる奥会津の人々の、数も知れぬドキュメンタリーを、やさしい筆遣いで編んでゆく。

そうして、あたらしい奥会津の風景を紡ぎ直すことをめざしたい。

奥会津ミュージアムはまた、

過疎化と少子高齢化が進む奥会津において、

そこに暮らす人々がより豊かに生きるために、

そして、奥会津の外からの訪れた人たちをやわらかく迎えるために、

あくまで地域に暮らす人々の内発的な思いと協働において、奥会津という豊饒なる物語を再発見し、育ててゆくことになるだろう。

〈都人よ　来ってわれらに交れ
世界よ　他意なきわれらを容れよ〉
〈風とゆききし
雲からエネルギーをとれ〉
〈われらに要るものは
銀河を包む透明な意志
巨きな力と熱である〉

宮沢賢治「農民芸術概論綱要」より

前沢曲家集落

まえざわまがりや

―南会津町―

今も人の営みが続く“日本の原風景” 農耕馬と生活を共にした雪国の集落

DATA **前沢曲家集落（前沢曲家資料館含む）**

南会津町前沢337番地
TEL：0241-72-8977（閉館中は不通）
開園時間：8:30-入場16:30まで
開園期間：４月中旬～11月中旬（2022年は11月13日まで）
協力金：300円、高校生以下150円（資料館入館料込み）、未就学児と南会津町民は無料

詳しくはこちら

集落には曲家が13棟ある。屋根がシートで覆われている写真左の家は茅の葺き替え準備中。道の脇には山からの湧水が流れる水路と７カ所の水場があり、今も生活に利用されている

明治40年の大火後に新潟の大工らが家屋を再建し 山あいの自然に溶け込む統一感ある景観が誕生

緑深い山を背景に、茅葺き屋根の古民家が身を寄せ合うように建ち並ぶ。“日本の原風景のよう”という表現がぴったりの前沢曲家集落には、現在も16世帯34人が暮らしている。「豊臣秀吉の奥州仕置により中丸（現・金山町）城主の山内氏勝が領地を没収され、家臣の小勝入道沢西が文禄年間（1592年～1596年）に移り住んだのがこの集落の始まりといわれています」と、集落住民でつくる「前沢景観保存会」おもてなしガイドの河原田光靖さん。約８割の住民の名字が“小勝さん”だという豆知識に歴史を実感する。

集落の家屋の多くは、中門造りと呼ばれる建築様式で建てられたL字型の曲家だ。河原田さんによると明治40年に集落で大火が発生し、土蔵以外の家屋の大半が焼失した。「古くから文化的交流があった新潟の職人が来て、近隣の大工とともに約３年の間に家屋を再建。同じ人たちが同じ時期につくったので、統一感のある景観が生まれました」。平成23年には国の重要伝統的建造物群保存地区に選定。大規模な観光誘客は行わず、住民の暮らしを守りながらも、前沢景観保存会を中心に「前沢ふるさと公園」や集落を一望する展望台の整備などを行い、訪れる人々を温かく迎えている。

明治38年築の前沢曲家資料館。同じ文化圏の旧伊南村から平成４年に移築し、当時の間取りのまま内部を公開している

雪国ならではの工夫が詰まったL字型の曲家 資料館で明治期の間取りや暮らしを見学

集落内にある『前沢曲家資料館』は明治期の間取りがそのまま残されており、当時の暮らしを見学できる。寄棟造りの母屋の土間から、切妻造りの中門が突き出る形でつながっているのが曲家の特徴。中門には馬屋、便所、風呂場があった。「この辺りは豪雪地帯なので、冬場外に出ないですむ構造になっています。昭和30年代後半までは各家に１頭馬がいて、農業と林業に使われていました。馬は家族同様の存在だったんです」と河原田さん。切妻造りの中門に出入口があるのも、屋根から落ちた雪で埋まらないようにする雪国ならではの工夫だという。

集落の茅葺き屋根は昭和40年代まで、村人同士の助け合い“結”によって30年～40年に一度、各家持ち回りで全面的な葺き替えが行われていた。「現在は南会津町の工務店に依頼し、古い茅の中に新しい茅を差し込む“差し茅方式”で痛んだ部分を直しています」。河原田さんに教えられ、家々の屋根に注目して集落を歩くと色の異なる茅が混在している家があることに気づく。おもてなし案内人によるガイドは無料（事前予約が必要）。詳しい解説や住民ならではの興味深い話が聞けるのでおすすめだ。

中門にあった馬屋。農具や民具、古い写真が展示され、当時の暮らしがうかがえる

母屋には囲炉裏のある「シタエン」「ウワエン（居間）」「ザシキ」などがある

集落には、平面形状が長方形の「直家（すごや）」も７棟ある

QUIZ

前沢曲家集落からのクイズです！

答えを知りたい方は前沢曲家集落へ Go!

前沢曲家集落にはかつて樹齢約800年の福島県指定天然記念物「前沢の大杉」がありましたが、平成４年に突風で倒れてしまいました。今も大杉跡に幹の一部が残っていますが、その幹回りは何メートルでしょうか。

前沢景観保存会おもてなしガイド 河原田光靖さん